

敬虔主義の範例と先駆：若きルターとアルントの場合

伊藤，利男

<https://doi.org/10.15017/2332573>

出版情報：文學研究. 89, pp.39-71, 1992-03-25. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

敬虔主義の範例と先駆

——若きルターとアルントの場合——

伊 藤 利 男

第一節 ルターの宗教改革の理念

敬虔主義の根本的な志向は、若きルターの精神に立ちかえって、墮落した教会を改革し、初期キリスト教時代のよ
うな純粹清新な信仰を現在に復活させよう、というものであった。若きルターの宗教改革の理念は、周知のごとく次
の三つの主張から成りたっている。

一、万人祭司主義 *Das allgemeine Priestertum*

二、聖書主義 *Der Biblizismus*

三、義認論 *Die Rechtfertigungslehre*

敬虔主義の範例と先駆 (伊藤)

この三つはそれぞれ別個の主張ではなくて、このうちのどれか一つを除外すれば他が成り立たなくなるほど、たがいに密接に結びついている。

第一の万人祭司主義は、神のまえでは人間はすべて平等であつて、靈的には皆ひとしく祭司であり、僧俗の区別はただひとつ職務のちがいに基づくものでしかない、という主張である。この主張はルターの著作のいたるところに見出されるが、いわゆる宗教改革三大文書の一つである『ドイツ国民のキリスト教貴族に与える』においては彼は、「すべてのキリスト教徒は本当は聖職階級に属し、そしてただひとつ職分による以外には、たがいに何の差異もない」と述べている。今ここで「聖職」と訳したドイツ語は *geistlich* という形容詞であつて、これはまた靈的、宗教的、教会の、とも訳される。また階級の原語は *Stand* で、これは「身分」とも訳される。したがつて「聖職階級」はまた「靈的身分」とも訳される。

さて、すべてのキリスト教徒は本来たがいに何の差異もないのだから、したがつて「教皇、司教、司祭、修道僧が聖職階級と呼ばれ、王侯、領主、手工業者、および農業者が世俗階級と呼ばれるのは、まったくの嘘いつわりである」⁽⁵⁾、というのである。そしてこの嘘いつわりは、教皇が支配するカトリック教会の専横である、とルターは主張するのであるが、この主張の根柢として彼は、『コリントの信徒への第一の手紙』一二章（一二・一三節）のパウロの言葉に基づいて、次のように説明する。「私たちはみな一緒でひとつ体となつていますが、しかしそれぞれの部分はそれぞれ自分の仕事をもつていて、それによって他の部分に奉仕するのである。これはすべて、私たちがひとつ洗礼、ひとつ福音、ひとつ信仰をもち、同じキリスト教徒であることに由来する。というのも、洗礼、福音および信仰、これのみが私たちを靈的にし、キリスト教徒とするからである。（中略）それゆえ私たちはみな洗礼によって清められて祭司となるからである」。宗教改革三大文書の他の二つ、すなわち『キリスト教徒の自由について』と『教会のバビロン幽囚について』においても同じように万人祭司主義が説かれているが、ここではその引用を省略する。

ルターの万人祭司主義の主張は、敬虔主義によって継承されることになる。

第二の聖書主義は、聖書を神の言葉としてキリスト教徒のあらゆる生活・行動の最高の指針、教えとする「聖書ノ」*sola scriptura*の立場である。「キリスト教徒の自由について」の第五節において、ルターは神の言葉である福音が、人間が生きるための唯一最高の拠りどころであることを、次のように強調する。「たましいは聖なる福音すなわちキリストについて説かれた神の言葉よりほかには、それによってたましいが生き、義となり、自由になり、キリスト教徒にふさわしくなるものを、天にも地にもたない。キリストご自身もこう言われる、『私は復活であり生命である。私を信する者は永遠に生きる』(ヨハネ一―二五)。同じく、『私は道であり、真理であり、生命である』(ヨハネ一四―十六)。同じく、『人はパンによつてのみ生きるのではない。神の口から出るいっさいの言葉によつて生きるのである』(マタイ四―四)。そこで私たちは、たましいが神の言葉以外にはいっさいの物をもたず済ますことができ、また神の言葉がなければどんな物もたましいの役にたたない、ということを確信しなければならない。しかしたましいは神の言葉があれば、他のどんなものもはや必要としない。たましいは神の言葉において満足を得る、食べもの、喜び、平安、光、技能、義、真理、知恵、自由とすべての善をあふれるほどにもつのである」。

また第十節では、神の言葉は聖、義、真、平和、自由という特性をもち、あらゆる善意にみちているので、本当の信仰をもつて神の言葉に愛着するものは、そのたましいが神とまたく合一し、したがってそのたましいはその信仰を通じて神の言葉により、これらの特性をおのれのものとし、あらゆる善意にみちて、そしてヨハネが「言葉は、みなにおいて信じる人びとにはみな神の子となる力をお与えになった」(ヨハネ一―一二)、と言うとおりに神の子となるのである、と説かれている。

ルターにとって神の言葉としての聖書が信仰の問題の中核とかかわっていることは、右の引用からも明らかである

が、教皇支配下の当時、聖書が教会自身によって専断的な取り扱いを受けていたことも明白な事実である。『ドイツ国民のキリスト教貴族に与える』においてルターは、「聖書を解釈すること、あるいは聖書の解釈を認証することは、ひとり教皇のみの権能であるというのは、不遜にも捏造された作り話であり、彼ら（＝教皇がわ）はこれを証明できるように文字をひとつも提示することはできない」と述べて、教皇のみが聖書解釈権をもつという法王庁の主張を否定するが、さらに同書中の大学と学校の改善を提案する節において、神学者たちのあいだでアリストテレスの諸著作や、法王庁が作った教会法の研究ばかりが行なわれて、「私たちがあらゆる事柄においてどのように振舞うべきか十二分に書かれている」⁷聖書がないがしろにされている現状が、きびしく批判される。「加えて法王は、多くのきびしい言葉で、自分の法律を学校や法廷で読んだり用いたりするよう命じている。しかし福音書のこととはほとんど何も考えられていない。そこでまた、学校でも法廷でも福音書はほこりをかぶって椅子の下に空しく横たえられているのであるが、これもまた法王の有害な法律だけが支配できるようにするためである」⁸。

このような現状に対してルターは主張する。「私たちは聖書の教師という名前と称号をもつからには、その名にふさわしく聖書を教えて、他の何物も教えないよう、本当に強制されてしかるべきである」⁹。また、「何よりもまず、上級の学校でも初級の学校でも一番重要でかつ一般的な課題は聖書であり、幼い子供たちには福音書でなくてはならない」¹⁰。さらに、「大学は、司教や司祭となって先頭に立って異端者や悪魔や俗世とたたかうことのできるような、聖書にもっともよく精通した人びとのみを養成すべきである」¹¹。

ルターのこの聖書主義もまた敬虔主義者たちによって受けつがれる。

第三の義認論はルターの宗教改革の理念の根幹をなすものであって、万人祭司主義も聖書主義もここから枝分かれしたものにほかならない。

義認論の思想は、『ローマの信徒にあてた聖パウロの手紙への序文』のなかの、「信仰のみが義とする」¹²というルターの言葉に要約されている。つまり、それは「信仰ノミ」so-la-fideの立場である。『キリスト教徒の自由について』第八節では彼は、「信仰のみが、あらゆるわざなしに、人を義とし、自由にし至福にする」¹³と述べる。義は、あるいは義とされることは、人間が永遠の生命を得る要件である。同書第六節では彼は次のように説いている。「しかしあなたがあなた自身のなかから外に出て、あなた自身から解放されるように、つまりあなたが破滅を免かれることができるように、神はその愛する息子イエス・キリストをあなたのもとに遣わして、その生きた、力づける言葉によって、こう言わせているのである。『あなたは固い信仰をもってあなた自身をキリストにゆだね、キリストをみずみずしく信頼するがいい。そうすれば、その信仰のゆえにあなたのすべての罪は赦され、あなたの破滅のすべては克服されて、あなたは正しく真実の人となり、平和のうちにあつて、義とされ、そしてすべての掟は充たされて、あなたはあらゆるものごとから自由になるでしょう』と。聖パウロもこう言っている、『義と認められたキリスト教徒は、その信仰によってのみ生きる』(ローマ一七)¹⁴。

以上見たとおり、義認論の核心は信仰による義である。人間は信仰によってのみ義とされ、永遠の生命を得るのである。万人祭司主義も聖書主義も同様に中心は信仰であつて、信仰なくしては成りたちえないことは、すでに見てきたことから明らかであろう。では、その信仰とはいったい何であろうか。ルターは右の『ローマの信徒にあてた聖パウロの手紙への序文』でさらに次のように述べる。

「信仰とは、ある人びとが、これが信仰だ、と考へているような、人間の妄想や夢想ではない。彼らが、生活の改善も善いわざも生じていないことが分つていながら、それでも信仰について多くのことを聞いたり話したりすることができるとすれば、彼らは誤謬におちいついて、そしてこう言うのである、『信仰だけでは不十分だ。義とされて至福を得るためには、わざを行なわなくてはならない』と。こんなわけで彼らは福音を聞けば、早とちりして、自分

で自分の胸のうちに一つの考えを作ってしまった、その考えが、『私は信じている』と言う。すると彼らは、これを本当の信仰と見なすのである。しかしそれは、心の奥底が気づかり知らない、人間の作りごとであり、人間の考えであるから、それは何も行なわないし、どんな改善もそこからは生まれてこない。

信仰は私たちの内部で行なわれる神のわざであって、それは私たちを変化させ、私たちを神から新しく生れさせ（ヨハネ一—二三）、そして古いアダムを殺して、私たちを心も、気持も、想念も、すべての力も、まったく別の人間とし、そしてかならず聖なるみ霊を伴なってくる。ああ、信仰とは生き生きた、いそいそしい、よく働き、力強いものだから、絶えず善を産みださないではいられないのだ。信仰はまた、善きわざが行なわれるべきかどうか問いもせず、問われるよりも先に、善きわざをしまし、そして常に善きわざを行なっているのである。¹⁵

ルターが説くところは、要するに、信仰とは人間がそれを得ようとしてどのような善行をおこなっても得られるものではなくて、人間の内部で行なわれる神のわざであるということ、そしてその神のわざ、すなわち信仰がその人間を生まれ変わらせる——もちろん霊的な意味で——ということである。さて、そこで私たちが知りたいのは、信仰に関してルターがどのようにしてこの認識に到達したか、ということであるが、彼は一五四五年、つまり彼の死の一年前に自分のラテン語版著作集の第一巻のために序文を書いて、この間の事情を回想している。つまり、当時ヴィッテンベルク大学の若き講師として、アウグスティヌス派修道院の塔の一室に住んで、聖書解釈学の研究に取りくむルターは、『ローマの信徒にあてた手紙』におけるパウロの真意を知ることと特別の努力を傾けていたが、これまでその第一章一七節中のある一語の意味をはかりかねて、もはや前進することができないでいた。同節の全文はこうである。「福音には神の義が啓示されているが、それは始めから終わりまで信仰を通して実現される。『義の人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりである」。

このなかの「神の義」という言葉にルターは道をさえぎられた。彼は従来の聖書解釈学の流儀にならって、この言

業を、神は義であり、義とは罪びと、義でない者を懲罰する正義である、というように理解していたからである。彼はそういう義なる神を愛することができなかった。憎みさえした。というのも、すでにあの旧約の時代にモーゼと十戒の掟をおして哀れな人間たちを罰すると言つて威嚇した神が、今度は福音をおして懲罰する正義を啓示しようとしているのではないか、というように彼には思われたからである。彼はこの疑惑に苦悶し、意識は混乱したが、しかし、以下ルターの言葉をそのまま引用すると、「私はパウロのこの同じ箇所を根気よく叩きつづけた。聖パウロが言おうとしていることは何か、知りたくて、灼けるような熱い渴きをおぼえた。神は私を憐んでくださった。日夜絶えまなくこの問題をじつと考えるうちに、私はやがて言葉の関連に、つまり、『福音には神の義が啓示され、**義の人は信仰によって生きる**』と書いてあるとおりである」と、という言葉の関連に注目するにいたつた。そこで私は『神の義』を、神の賜物としての義によって義の人が生きるところのその義、つまり、義の人が信仰によって生きるころのその義として理解しはじめた。そして私はこれが、福音によって神の義が啓示されるという言葉の意味であること、つまり、それは与えられる受動の義であつて、その義によって慈悲ぶかい神は私たちを信仰に基いて義とすること、それは、**義の人は信仰によって生きる**、と書いてあるとおりである、ということが分りはじめた。そのとき私は、自分がまったく新しく生まれたように感じて、そして私は開かれた門をおつて楽園の中へ自分で入つていった。そのとき聖書の全体が私にはこれまでと完全にちがつて見えた。私は記憶にある限りの聖書の章句を頭のなかで通読してみても、そして他の言葉にも同じことを発見した。たとえば、『神のわざ』は、神が、私たちの内部で行なうわざを意味し、『神の力』は——それによって神が私たちを力あるものにする力、『神の知恵』は——それによって神が私たちを知恵あるものにする知恵、を意味することを発見した。同じことが、『神の強さ』、『神の幸福』、『神の名誉』にも当てはまるのである¹⁶⁾。

このように、ルターの義認論の成立は、彼自身が創出した新しい聖書解釈学¹⁷⁾の成果にほかならない。

義認論もまた敬虔主義によって継承されたが、しかし重点は「信仰ノミ」の立場から、人はどのようにしてすでにこの世で永遠の生を得ることが出来るか、あるいは得なければならぬか、という問題に移しおかれた。義認論は正統ルター派教会の教義の中心的命題として伝えられていく一方で、宗教改革が一応の成果をおさめたのち、世代が新しくなってくるにつれて、人びとの関心から遠去っていかざるをえなかった。教会史学者J・ヴァルマンの言葉を借りれば、「信仰にもとづく義認という宗教改革者（＝ルター）の福音は、罪責に苦しめられて善きわざに、巡礼と贖宥におのれの魂の救いを求めていた中世後期の人間の状況に合致した。しかしその宗教的状況は、信仰にもとづく義認が解放の福音の響きとなってその中へ入っていくと、まさにこの福音によって変えられた、いや、破棄されてしまった。今や幼い子供までもが、神とは罪を赦し、信仰よりほかの何物も要求しない情深い神様のことである、ということとを学んだ。宗教改革の初期、ドイツに氾濫したルターの著作は、宗教改革後第二世代第三世代になるともう広範な読者層を見出さなくなった。宗教的関心は今や義認を通りすぎて、そのあとにやってくるもの、信仰の後に続くものを問題にした」¹⁸。

信仰の後に続くものとは、ヴァルマンも言うように、「聖化と再生」¹⁹ Heiligung und Wiedergeburt すなわち「敬虔な生活」¹⁹ frommes Leben である。敬虔主義者たちはこの聖化と再生、敬虔な生活を自分たちの運動の中心的課題として取りあげる。しかしこれは彼らによって初めて取りあげられたのではない。彼らの指導者シュペーナールのいわば綱領書である『敬虔ナル要望』（一六七五年）に先立つこと七十年、また宗教改革三文書（一六一〇年）から八十五年を経たとき、ルター派協会の牧師ヨーハン・アルント（一五五五―一六二一）が出版した『真のキリスト教』第一巻がこの問題を詳細に扱うのである。

第二節 アルントの『真のキリスト教に関する四巻』

アルントの生涯

ヨーハン・アルントは一五五五年中部ドイツ、ザクセンのアンハルト侯国のケーテン近郊エッデリッツにルター派牧師の長男として生れ、十歳のときに父を喪ったが、アッシャースレーベン、ハルバーシュタットおよびマクデブルクで中等教育を受けたのち、一五七五年から八一年までヘルムシュテット、ヴィッテンベルク、シュトラースブルク、バーゼルの各大学で医学と神学を学んだ。バーゼルでは彼はある医学者にすすめられてパラツェルズスの著作に親しみ、それ以来生涯のあいだ自然科学に関心をもちつづけた。学業をおえて故郷へ帰ったアルントは、初め学校教師になったようであるが、八三年バレンシュテットの教会の副牧師の職につき、翌八四年バーデボルの牧師に任命された。しかし一五九〇年、アンハルト侯国政府が領邦内のこれまでルター派に属していた教会を改革派（＝カルヴィン派）に変えるよう指示したとき、彼はただ一人これに反対したため解職されて故郷を去った。一五九二年彼は、のちに敬虔主義の中心地となるハレの近くに位置するクヴェートリンブルクに牧師として招かれ、九九年にはブラウンシュヴァイクのマルティン教会に移り、さらに一六〇八年アイスレーベンに転じたあと、一六一一年ブラウンシュヴァイク・リューネブルク侯国の管区總監督兼宮廷牧師に任命されてツェレに移り、一六二二年同地に没した。

著作家としてのアルントは、クヴェートリンブルク時代に『聖画像論』（一五九六）を書いてカルヴィン派教会の聖画像への敵意を論難したのを始めとして、一五九七年にはペストの流行に強い衝撃を受けて説教集『エジプト人の十の厄災について』を書いた（印刷は一六五七年）。また同時に彼は、かの匿名のフランクフルト人の手になる『ドイツ神学』の新版（一五九七年）を刊行し、さらに一連の神秘主義の信仰促進文学書の再刊を行なった。

アルントの主著『真のキリスト教に関する四巻』（以下、『真のキリスト教』と略記する）は、最初は『真のキリスト教と効験ある悔い改め、キリスト教徒たちの敬虔な生活と行状について』という題で一六〇五年フランクフルトで発行され、そのあと初めて、これを第一巻とする四巻本の構想がたてられて、一六一〇年マクデブルクでその完成本が出版された。のちにこの四巻にさらに第五・第六巻が「付録」として付け加えられて『真のキリスト教に関する六巻』となり、何回も版を重ねることになる。一六一二年彼は『キリスト教徒にふさわしい徳の華咲く天国の小庭園』という祈祷書を出版して多数の愛読者を見出したが、後にこの本はしばしば『真のキリスト教』の新版に付録として収められた。その他、アルントは多くの信仰促進書を著したが、その詳細はここでは省略する。

さて、このようにアルントの生涯を略述すると、彼は牧師としては自分が所属する教会に忠実であったがゆえに一度は職を失ない、復職後は着実な歩みをつづけて最後は管区總監督兼宮廷牧師に昇進するなど、順調な経歴を歩んだような印象を与えるが、しかしブラウンシュヴァイクでは、『真のキリスト教』第一巻初稿本の内容の一部が正統ルター派教会の教義を逸脱するという理由で、同僚の牧師たちとのあいだに軋轢をうんだのを始めとして、別の任地へ移ってからも、たとえばダンツイヒの牧師コルヴィヌスやテュービンゲンの神学者ルーカス・オジアンダー等から非難攻撃を受けた。しかし『真のキリスト教』が、広範な読者から多大の賛同と支持を受けたことはいうまでもない。

信仰促進文学としての『真のキリスト教』

信仰促進文学という語はわが国ではまだ耳なれていないが、それは狭義の文学、すなわち自律的な芸術としての文学ではなくて、目的に奉仕する文学である。G・ザウダーの記述を借りるならば、それは「原則として霊的・宗教的生活の促進と育成に奉仕し、キリスト教徒にふさわしい徳の生活の完成への手引きをする文学である。『信仰促進文学』は『祈祷書』や『修徳文学』というようなしはしばしば同義語として用いられてきた複数の専門用語に対抗して出来

た集合概念として理解される¹⁹⁾。信仰促進文学の領域に属するものとしてザウダーが挙げるのは、「祈祷書、讚美歌、聖書章句の解釈書（ポステイレ）へ主日・祝日の書簡および聖福音の説教と解説集」、ホミリアルへ聖書の一節についての説教、聖書による教化説教、敬虔な信仰の対象についての考察録、聖書中の人物と聖者たちの人物についての考察録、弔送慰安録、懺悔録¹⁹⁾である。聖書そのものや教義書、専門的な神学論文などは信仰促進文学には数えられない。また神秘主義者たちの著作も、信仰促進の道案内として構想されたものでなければ、除外される。

宗教改革以降十八世紀中葉にいたる時期、ドイツの中層階級の読書生活において、信仰促進文学はほとんど支配的な地位を占めていたと想像される。ザウダーによれば、一七四〇年にドイツで出版された図書の書名は、二八パーセントがラテン語であるのに対してドイツ語の書名は七二パーセントであり、その七二のうち一九が信仰促進文学で、純文学は六にすぎなかった²⁰⁾。ということは、この時代、人びとは純文学を読むよりも遥かに多く信仰促進文学を読んでいた、ということにはほかならない。

宗教改革以降のプロテスタント・ドイツの信仰促進文学のなかで最も広く普及した本は、『真のキリスト教』であると言われている。著作権というような概念のなかった時代のもので、ある本を読んで感銘を受けた人が、自分の資金でこれを再版して人びとに配布する、ということがしばしば行なわれたが、『真のキリスト教』はその最も顕著な例であった。ドイツから北米大陸へ最初に移民した人びとはこの本を携えて海をわたり、そしてこの本の残部がなくなってしまう一七五一年、フライデルフィアの印刷業者ベンジャミン・フランクリンは、五百人の予約購読者を集めて新版を印刷発行した。またこの本はすでに十七世紀のうちからヨーロッパの各国語に翻訳されてそれぞれの国で読まれ、ラテン語版も出版され、またカトリック地域でもよく読まれた。

庶民階級の家庭のなかへ入っていった『真のキリスト教』は、聖書を別にすれば、その家の唯一の書物である、というような例が多かった。日々のお祈りの時間、文字を識っている一人が朗読し、他の家族はそれに耳を傾けた。一

日に一章づつ——それは一回の朗読量として適当な長さであった——、一年かけて読みおわると、また第一巻第一章に戻って読みはじめる、というやりかたで何度も何度も繰りかえし読まれたようである。こうして『真のキリスト教』は十七世紀から十八世紀中葉すぎまで、ドイツ庶民の信仰を促し進め、そして同時に、その洗練されたとは言えないまでも、素朴な美しいドイツ語は、彼らの言語陶冶に大きく貢献したのである。

『真のキリスト教』の構成

原典として用いたのは一七六五年ピールで印刷された本である。引用の原典箇所は巻章節で本文中に示すことにする。標題ページは次のとおりである。

リューネブルク侯国の管区總監督で、神の照明を受けた故ヨーハン・アルント氏の、効驗ある悔い改め、罪に対する心からの後悔と真の信仰および正しい真のキリスト教徒の聖なる生活と行状について述べる真のキリスト教に関する六巻。ギーセン版から取った手引およびすべての章に対する短い祈祷文を付し、さらに従来第五巻第六巻の名で出版されていたものすべてと、またラテン語からドイツ語に訳された著者の公開状のうちこの書にふさわしい数編を添える。ピール、ヨーハン・クリストフ・ハイルマン書店、一七六五年。²¹

目次は以下のとおりである。

第一巻 聖書

どのようにして真のキリスト教徒のうちには日々アダムが死んで、キリストが生きるべきか、そして、どのように

して真のキリスト教徒は神のすがたにならって日々新たにされ、そしてその新しい誕生のうちに生きねばならないか。

第二巻 キリストの生

どのようにしてキリストの受肉が愛であり、謙讓、柔和、忍耐、受苦、死、十字架、恥辱と死が私たちのたましいの葉と療養の源泉、私たちの生命の鏡と本であるのか。そしてどのようにして真のキリスト教徒は罪、死、悪魔、地獄、俗世、十字架およびすべての苦難に、信仰、祈り、忍耐、神の言葉と天上の慰安によって打ちかつべきか。そしてそのすべてはキリスト・イエスのうちに、イエスの力と強さと勝利によって私たちのうちにあるということ。

第三巻 知

どのようにして神は最高の宝であるその御国を、畑地にかくされた宝として、たましいの神的な内なる光として、人間の心のなかへ置いたか、そしてそれはどのようにして私たちのうちに目ざめさせられ、探されねばならないか。

第四巻 自然

どのようにして自然についての大きな宇宙書は神について証し、神に導くか。

第五巻・第六巻については省略する。目次の次に「ヨーハン・アルントの真のキリスト教に関する六巻への手引」がくるが、この「手引」はのちの編者の手に成るものと思われる。初めの四巻はいずれもアルントの「序文」で始まり、第一巻は四二章、第二巻は五八章、第三巻は二三章から成り、第四巻は二部に分れ、第一部六章、第二部四十章

から成る。なお、第一巻の第四二章は「結び」の章を兼ね、第二巻は最終の第五八章のあとに「結び」を添えるが、第三巻は「結び」をもたない。第四巻にも第四巻自身の「結び」はないが、第二部四十章のあとに四巻全体をしめくくる「結び」がつづく。

各章はまずその章で扱う主題を示し、次いでそれに関する聖書の章句を掲げ、そのあと本文が始まる。その本文は節に分れていて、その数は平均十節ほどであるが、なかには五六十節にもわたる章もある。本文が終ると、そのあとに「祈り」が来るが、それはその章の内容を要約するものである。第四巻を別にして、第一巻から第三巻まで見ると、一章の長さは第一、第二巻で平均六ページ、第三巻は平均四ページで、これは学者や特別の読書人ではない一般信者にとっては、一回の読書量として適当な長さだったであろう。

『真のキリスト教』第一巻への序文

序文冒頭の一節でアルントは執筆の動機と目的を次のように明快に語っている。

「この最近の世のなかで聖なる福音の濫用がどんなに甚だしく、どんなに恥ずべきものであるか、キリスト教徒である親愛なる読者よ、キリストとその言葉を口をきわめてもてはやしながら、自分はキリスト教世界ではなくて異教国にくらしているかのように、キリスト教徒にまったくふさわしからぬ生活をおくっている人びとの罰当りな、懺悔をする気のない生活が、十分に示している。そのような罰当りな行状を見て私はこの小さな本を書こうと思いたったが、それは素朴な人びとに、真のキリスト教とは何であるかということ、つまり真のキリスト教とは誠実な敬神によって、義のもろもろの果実によって、真の、生きた、いそいそしい信仰を証明することであることを分ってもらいたいからである。私たちがキリスト教徒と呼ばれるのは、私たちがキリストを信じるだけではなくて、私たちがキリストのうちに生き、キリストが私たちのうちに生きるようになるためであるということ、真の悔い改めは心の一番内部の

奥底から発しなくてはならないということ、私たちがキリストおよびその聖なる福音と同形になるよう、心、思い、気持が変えられなくてはならないということ、私たちは神の言葉によって日々新たにされて新しい人間にならなくてはならないということを、分ってもらいたい。というのも、たねの一粒一粒が同じたねを産みだすのと同様に、神の言葉は私たちのなかに日々新しい霊的果実を産み出さないではいられないからである。私たちは信仰によって新しい人間になったならば、その新しい誕生においてもまた生きなければならぬ。要するに私たちのうちなるアダムが死んで、キリストが私たちのうちに生きなくてはならない。神の言葉を知るだけでは十分でない。その言葉を生きた、いそいそしい実践に移さなくてはならない。

執筆の動機は、最近の、キリスト教徒を自称する人びとの、キリスト教徒にふさわしからぬ罰当りな生活態度に対する公憤ないし批判である。彼らの行状はまさにキリストの福音を恥知らずにも濫用するものであるといふのである。このような弊害の原因は人びとが、真のキリスト教とは何であるのか、知らないことにあるから、アルントはそれを人びとに分らせようといふのである。彼がここで、真のキリスト教の特性を、いくつかの言い回しによって示すが、それは右の引用の最後の言葉、「神の言葉を知るだけでは十分でない。その言葉を生きた、いそいそしい実践に移さなくてはならない」、に要約されるであろう。ここで「知る」は、「私たちがキリストを信じるだけではなくて」「信じる」と同じ意味で用いられていることは明らかである。そこで右の文は、「神の言葉を信じるだけでは十分でない」と読むことができるが、「信じるだけでは十分でない」、という考えはまさにルターの義認論「信仰のみが義とする」を制限し相対化するものである。「神の言葉を実践に移さなくてはならない」というのがアルントの新しい主張である。

「キリスト教徒である親愛なる読者よ」、アルントは序文の始めでこう呼びかけているが、この読者とはいったい誰であろうか。彼が、真のキリスト教とは何であるか、分ってもらいたいと考えている「素朴な人びと」が、読者で

あることは、だれの目にも明らかであろう。それでは、「キリスト教徒にまったくふさわしからぬ生活をおくっている人びと」は、読者の資格を否認されるのだろうか。筆者にはそうとは思われない。むしろこの人びとこそ読む必要がある、というのも、彼らはキリストとその言葉をもてはやすからには、少なくともそれについてある程度知っているはずである。もし彼らがそのような口さきだけの振舞いをやめて、心の奥底から悔い改めるならば、その言葉を実践に移すことができるようになる。そもそもこの『真のキリスト教』は、神を、キリストを知り、信じることだけでは不十分であることを教える本である、というか、あるいは、すでにルターによって信じることを教えられた人びとに、その先のことを説き勧めようという書物にほかならないのである。

「神の言葉を実践に移す」のが真のキリスト教であることを読者が理解したとして、その実践が具体的にどういう内容のものであるか、またその方法はどうか、これらの問題について觸れるのが第二節以下である。第二節は次のように始まる。

「神学は生き生きとした経験と実践であるにもかかわらず、単なる学識と修辞学にすぎない、と思っている人が多い。だれもが今や、どのようにして世の中で偉くなるか、有名になるかと思つて、学問をするが、しかし信仰を篤くすることを学ぼうとする者はいない。だれしも今や、博士の師を求めて技芸と語学と博識を学ぼうとするが、しかし私たちのただひとりの博士であるイエス・キリストから柔和と心からの謙讓を学ぼうとする者はいない」。この発言は、『真のキリスト教』が「素朴な人びと」とともにとりわけ神学を学ぼうとする者、すなわち神学生を讀者に想定していることを示している。神学生は将来牧師になる者たちであるが、彼らに最も必要なものは単なる学識ではなくて、真の篤い信仰であり、実践であり、それを教えてくれるのはキリスト自身である。アルントはこうつづける。「イエスの聖なる生きた先例こそが私たちの生活の本当の手本、最高の学識と技芸である。(中略) だれもがキリストに奉仕する者になりたがるが、キリストに倣い従う者になろうとする者はいない。キリストはしかしこう言われる、

『わたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがいい』（ヨハネ二二二六）。だから、キリストの本当の奉仕者であり崇拜者である者はまたキリストに倣い従う者でもなくてはならない。キリストを愛する者はまたキリストの聖なる生活の手本を愛さなければならない』。

キリストの手本というのは、キリストが示した謙讓、柔和、忍耐、キリストが甘受した十字架、屈辱、侮蔑などをさすが、このようなキリストの謙讓と卑下を恥ずかしく思うのが世の大部分の者たちである、とアルントは言う。そして、「キリスト教徒たちは今は立派な豪勢な世間むきのキリストを持ちたいと思っているが、しかし貧しく柔和で謙虚で、軽蔑されて卑賤なキリストをだれも持ちたいと思わず、だれも知りたくないと思わず、まただれもあとに従おうと思わない。だから、いつかキリストはこう言われるだろう、『わたしはあなたがたを全く知らない（マタイ七一二三）、あなたがたは謙讓のうちにある私を知ろうと思わなかった、だから私は傲慢のうちにあるあなたがたを知らない』」。

キリスト教徒にとって必要なことは知識や技芸ではなくて、イエスの生きた先例に倣い従うことであるというアルントの考えは、ルターの聖書主義と相通するものである。

第三節は人間の傲慢に対する神の怒りについて述べる。「しかし神に背いた生活と態度は、キリストと真のキリスト教に反するだけではない。それは神の怒りと罰を日々増大させている」とアルントは言い、そして神にそむいた人間たちは、いつ何時、戦争、飢餓、悪疫、いや、あのイスラエルの子らがエジプトを退出する前にエジプト人たちが襲ったような世にも怖しい災厄に襲われるか知れたものではない、と警告して、次のように説くのである。「それゆえ今こそ悔い改めて、新しい生活に着手して、世の中からキリストへ心を回し、キリストを本当に信じて、キリストのうちにキリスト教徒にふさわしく生きるべき時である。それは私たちが、『いと高き神のもとに身を寄せて隠れ、全能の神の陰に宿る』（詩篇九一一）ことができるためである」。

第四節では、罪は信仰によって赦されるが、それだけではなくて、キリスト教徒は神の慈悲を聖なる生活のために正しく用い、信仰をキリスト教徒にふさわしい生活態度でもって飾り、証明しなければならぬのであり、そしてそうするための手引を与えるのが、この『真のキリスト教』である、と述べる。というのも、「真のキリスト教は言葉や外見ではなくて、生きた信仰であり、その信仰からはよく熟れた果実とキリスト教徒にふさわしいあらゆる徳が、キリストご自身からと同じように、生れるのである。信仰は人間の目に隠されていて見えないので、その果実によって証明されなくてはならない」。

信仰の果実は第五節で列挙される。「信仰が信仰に約束 (versprechen) されている約束 (verheissen) の財宝を動揺なく待ちつづけると、信仰から希望が生れ得る。(中略) しかし信仰が受けとった財宝を隣人に分ち与えるならば、こんどは信仰から愛が生れ得て、その愛はまた、神が信仰のためになされたことを、隣人のために行なう。しかし信仰が十字架の試練に絶えて、神の意志におのれを委ねるならば、こんどは信仰から忍耐が生じる」。以下、それぞれのやりかたで信仰から祈りが、謙讓が、神への畏敬が生れ得てくるのである。

第六節ではアルントは、前の節で列挙したような信仰の諸果実が、人間のわざ、功績、才能あるいは美德ではなくて、あくまでもイエス・キリストの高貴な、完全な功徳であって、それが信仰によって捉えられたのである、ということを強調して、そのあと、誠実な悔い改めの必要性を説くのである。「あなたはあなたの悔い改めを正直な真剣なものにしなければならぬ。さもないとあなたは、日々心を浄め、変化させ、改善させる誠実な信仰をもつことにならない。あなたに知っていて貰いたいのが、福音の慰めも、心を打ちこわし打ちくたく誠実な真の悔いと神的な悲哀が先行しないところでは、何の保証もできない。聖書にいう、『貧しい人びとにこそ福音は説教されて「効果をあらわす」アルントの原文には欠』(ルカ七一・二二)。心が真剣な悔いと悲哀と、罪の認識によって前もって殺されないならば、その心をどうして信仰が生きたものにすることができるだろうか」。

第七節は『真のキリスト教』ではまた、キリスト教徒はすべてを愛のうちになさなければいけない、ということを取らう、と予告する。というのも、キリスト教徒にふさわしい愛に基いてなされることは、信仰から出づるものであるから、という。そしてアルントは、この本にはヨハネス・タウラー、トマス・ア・ケンピスその他の古い時代の著作家たちの「意見にならった若干の意見」が混入されている、と述べるが、これはアルントがそれらの神秘主義者たちの著作に親しみ、その影響を受け、そしてみずからも神秘主義的思索を深めたことの告白でもある。彼は読者に対して、「私たちが目に見えない生れながらの怖い原罪を意識し、私たちの悲惨と無常を観察することを学び、私たち自身と私たちのすべての能力に絶望し、私たち自身からすべてのものを奪いとって、そしてキリストにすべてのものを与える」ようになることが、この書物の目ざす所であることを見てとってほしい、と要請する。それは、「キリストのみが私たちにおいてすべてであり、私たちのうちにすべてを行ない、私たちのうちにひとり生き、私たちのうちにすべてを造るためである。なぜならばキリストは私たちの回心と至福の始めであり中ばであり終りだからである」という。アルントのこの考えは「キリストとの合一」という神秘主義的思想と密接にからみあうものである。

序文の結びの言葉は次のとおりである。「私たちの主イエス・キリストの日まで私たちが信仰と生活において深く慎しくあつて、義の果実にみたされて、神を賛美するよすがとなるよう、神が私たちみなを聖なるみ霊によって照明したまわんことを、アーメン」。

以上に見た第一巻序文は一六〇五年のフランクフルト版にはなくて、一九一〇年の四巻完成版において初めて付けられたものであつて、したがつて単に第一巻の序文ではなくて、『真のキリスト教』全巻への序文の性格をもなっている。したがつてまた、この序文からアルントのキリスト教観の概要を汲みとることも可能であろう。

『真のキリスト教』

『真のキリスト教』は内容的には二部に大別される。最初の三巻が人間論的 (anthropologisch) な方向の一纏りをなしているのに対して、第四巻は宇宙論的 (kosmologisch) に方向づけられている。⁽²²⁾ 最初の三巻についてアルント自身は、第三巻への序文冒頭で次のように述べている。

「私たちの肉の人生は幼年期と壮年期、老年期という段階をもっているが、私たちの霊的な、キリスト教徒にふさわしい人生も同様である。というのも、後者は悔い改めに始まり、それによって人間は日々改善されてゆく。悔い改めのあとに来るのが壮年期としてのより大いなる照明であって、それは神的なものごとの観察を通じて、祈りを通じて、十字架を通じて来るのであって、これらすべてによって神の賜物が大きくされるのである。最後にくるのは完成の年代で、それは愛による〔神・キリストとの〕完全な合一のうちにやってくる。(中略) 私はこの〔最初の〕三巻においてこの順序をできるかぎり顧慮した」⁽²³⁾。

アルントのこの記述は、『真のキリスト教』第一巻が「悔い改め」の、第二巻が「照明」の、第三巻が「合一」の論述に排他的に振り分けられている、という意味ではない。すでに第一巻第一章で「合一」が語られる一方で、第三巻でも「悔い改め」が再三再四強調されるのである。もともと『真のキリスト教』は、著者の牧師として重要な仕事である説教をもとにして作られたものであって、厳密に体系づけられた学術書とは異なる信仰促進文学なのである。各巻の各章は全体の主題を反映しつつ、それ自体で一つの完結した説教として読むことができるのである。

そこで、そういう説教の一例を紹介するという意味をもこめて、第一巻第一章を観察すると、まず「第一章 人間のうちなる神のすがたとは何であるか？」という標題につづいて、『エフェソの信徒への手紙』第四章二三・二四節「あなた達は心の真髄において新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着けて、正しい義と聖のうちに生きなさい」、を引用する。本文は十節から成り、そのあと「祈り」の言葉で第一章が締めくくられる。この標題、

聖句、本文、祈りという章の構成は、第一巻から第四巻まですべて同じであるが、本文の節の数はさまざまである。さて、第一節を省略なしに引用すると、以下のとおりである。

「人間のうちなる神のすがたとは、人的な心魂、知力、精神、心情、意志、ならびに内的および外的なすべての身体・心魂の力が、神および聖なる三位一体、ならびにその神的な本性、徳性、意志、特質と同形であるということである。というのも、聖なる三位一体がこう提案したからである、『私たちと同じすがたをした人間を造ろう。人間に、海の魚、空の鳥、すべての家畜と地のすべてを支配させよう』（創世紀一―二六）」。

ここで注目すべきことは「同形」である。これは、文脈から明らかのように、外見上の形が同じということではなくて、外的にも内的にも同等であることを意味する。第二節以下は適宜に省略しつつ紹介する。

「このことから明らかになるのは、人間の心魂、知力、意志と心情に、いや、人間の生活と行状のすべてに、神の神聖と正義と慈悲があらわれ光り輝くよう、人間のうちに聖なる三位一体がかたどられているということである。（中略） 神は人間を「ご自身の子として」ご覧になって、よろこび、満足しようと思われた。（中略） 人的な心魂の三つの高貴な力、すなわち知力と意志と記憶は、神によって植えつけられているのである。この三つを作って見守り、きよめ輝かせるのは、聖なる三位一体である。聖なる三位一体はこの三つを「ご自身の恩寵のわざと賜物によって、よそおい飾るのである」。

第三節では人間の心魂を、神のすがたのみが映る鏡にたとえて、そしてこう言う。「鏡が曇りなければいほど、そこに映るすがたはそれだけいっそう純粹に見える。同様に、人間の心魂が純粹で明澄であればあるほど、そこにあらる神のすがたは明るく光りかがやく」。

第四節では、人間のうちなる神のすがたがそのようにひかり輝いて見えるように、神は人間にあらゆる身体・心魂の力を与え、純粹、明澄、無垢なるものとして人間を造った、それも死んだ影としてではなく、生きたすがたとして、

目に見えない神のすがたと同じすがたに造った、という。すなわち、「人間の知力における神の聖なる知恵のすがた、人間の心情における神の慈悲、寛容、柔和、忍耐のすがた、人間の心の情動における神の愛と憐憫のすがた、人間の意志における神の正義、神聖、清澄、純粹のすがた、人間のすべての挙動と言葉における親切、優雅、愛嬌、および真実のすがた、地のすべてに対して与えられた人間の統治権における、またすべての獣畜を支配する人間への畏怖における全能のすがた、人間の不死性における神の永遠性のすがた」として造ったというのである。

次には人間は神と自己をどのように認識すべきか、という問題が扱われる。まず第五節でアルントは、「(人間は)創造主である神を、神はすべてのものであり、唯一最高の存在であって、この最高の存在によつてすべてのものはそれぞれが存在をもつというように、また神は本質的にすべてであり、その神のすがたが人間であるというように、認識するがいい」と述べる。そして、神は本質的に最高の、いっさいの善であり、本質的に愛であり、生命であり、聖であるがゆえに、「いっさいの名譽、称讚、崇拜、讚美、尊嚴、強健、威光、活力は神のものであって、人間のものではなく、ご自身が本質的にこれらすべてのものである神おひとりのものである。それゆえ、『マタイによる福音書』一九章一七節で、主をまつたくだの人間と見たある人が主に、『善い先生、永遠の生命を得るために私はどんなことをしたらいいでしょうか』、とたずねたとき、主はこう答えられた、『なぜ私を善いと呼ぶのか。永遠の神よりほかに、だれも善い者はいない』。つまり、神おひとりだけが本質的に善いのであって、神なくしては、また神のほかに、本當の善はありえないのである」、と言うのである。

一方、人間の自己認識については第六節で次のように述べる。「人間はしかし自分の絵すがたから自分自身を認識し、人間と神の間には違いがあると考えるがいいだろう。人間は神そのものではなくて、神のすがた、似すがた、模写、複製であって、その中でのみ神はご自身をあらわしたもうののだ、と。それゆえ、人間のうちに生き、ひかり輝き、行動し、意欲し、愛し、考え、語り、喜ばせるのは、神よりほかの何者かではないのだ、と考えるがいい。(中略)

人間は神に完全に委ねられ任されていなくてはならない。それはすなわち神の意志のまったくの純粋な受容であつて、こうして、ひとは自分のうちで神にすべてのことを行なわせ、自分の意志を否定するのである。それは、すなわち、神にまったく任せるといふこと、つまり、人間が神とその聖なるご意志とあらゆる神聖なお仕事のまったくの、純粋な、まじりもののない聖なる道具であるとするならば、その人間は自分自身の意志を行なわず、神の意志が自分の意志でなくてはならない。(中略) もし人間が自分の意志を實行するのでなくて、自分のなかで神にすべてを行なわせ完成させるならば、それは最高の無垢である。いや、それは自己の名譽、自己の愛をまったくもたない無邪気な童子に見られるような最高の純真である」。この節で敬虔主義との関連でとりわけ注目しなければならぬのは、人間の自己否定と、人間は神の道具であるという考え方である。

次の第七節ではキリストが登場する。「このように神は人間をうちからも外からも全面的に所有することになるが、その実例を私たちは主イエス・キリストにおいてもっている。キリストが完全な神のすがたであるゆえんは、ご自身の意志をその天なる父に、最高の従順のうちに、最高の謙讓と柔和のうちに、いっさいの名譽、いっさいの自己愛、私利、自己占有、いっさいの自己の快樂と歡喜をもたずに、完全に犠牲にささげたからである。(中略) 要するに、キリストの意志は神の意志であり、神の満足である。そのゆえに神は天からこう叫ばれたのだ、『これは私の愛する息子、私の心にかなう者である』(マタイ三一一七)。(中略) 目に見えない神はキリストにおいてはつきり目に見えるようになって、ご自身をキリストにおいて人間にお示しにならうとされた」。

キリストの次に登場するのはアダムである。第八節はこう語る。「アダムのうちなる神のすがたもまた聖なる無垢であつた。そしてアダムはその神のすがたを眞の謙讓と従順のうちに守り、そして彼自身は最高の善ではなくて、彼自身のうちにかたどられた最高の善のすがたにすぎないといふことを認識していたであらう。しかし彼自身が最高の善に、つまり神そのものにならうと思つたとき、彼は最も忌むしい最も恐ろしい罪に墮ちたのである」。

第九節でアルントは、「人間は、自分がこの神の似すがたであるということによって、神のような優しい慈悲ぶかい愛、喜び、安らぎ、強さ、力、平和、光に適するものとなったということを自己認識しなければならない」、と述べたあと、最後の第十節で次のように説く。

「最後に、人間は「自己のうちなる」神のすがたにもとづいて自己をこう認識するがいい、すなわち、人間はその神のすがたによって神と合一している、そしてこの合一のうちに人間の最高の安らぎ、平和、喜び、生命および至福が存する、と。その反対に、人間の最高の不安と不幸が生ずるのは、人間が神のすがたに逆らって行動し、神に離反して、最高の永遠の善をうしなう場合よりほかにありえない」。

以上で第一章の本文が終って、そのあと「祈り」がくるが、これは本文の内容を祈りの形で平明に要約したものである。訳文は註欄にかか²⁴ける。

この第一章が『真のキリスト教』の序論として、人間とは何であるか、という最も基本的な問題を論じていることは、改めて強調するまでもない。人間とは、最後の節がのべているように、神のすがたによって神と合一している存在であって、その合一が人間の至福を保証するが、人間が神に離反した場合、つまり合一をうしなったとき、人間は最大の不幸におちいるというのが、アルントの人間論の基本である、と言うことができよう。この人間論からすれば、現在の人間の不幸はまさにこの合一の喪失に起因する。そしてその合一の回復が人間の課題であり、人間はどのような課題にとりくむべきかを説くのが、『真のキリスト教』の目的なのである。

さて、この第一章で提示された基本問題から当然いくつかの重要な問題が生じ、さらにそこからまたさまざまな問題が派生してくるが、それらは第二章以下で詳細懇切に扱われる。たとえばまず第二章は、「アダムの墮罪とは何であるか？」という標題をもち、第一節でこう述べる。「アダムの墮罪は神に対する不従順である。この不従順によって、人間は神から離反して人間そのものになり、そして自分が神になろうとしたことによって神の面目を失墜させた

のである。その不従順によって人間は聖なる神のすがた（中略）を奪いとられ、知力は光をさえぎられ、意志は不従順になり神に反抗的になり、心のあらゆる力は逆向きにされて、神の敵となったのである。この戦慄すべきことは、肉による誕生によってすべての人間に伝えられ受け継がれる。これによって人間は靈的には死んだ、死滅したのであり、怒りと永劫の罪の子となった。（中略）素朴なキリスト教徒であるあなたは、アダムの墮罪を、林檎を喰べただけだというような、単純な取るにたらない罪とってはならない。彼自身が神になろうと思ったことが、この墮罪だったのだ」。アダムの墮罪はすでに第一章八節で簡単に取りあげた項目であるが、改めて、このように詳細に説明することによって、素朴な読者に真に得心させようとするのである。右の記述のあとアルントは、神に離反した人間の状態がどんなに悲惨な、どんなに戦慄すべきものか、詳しく描いたのち、最後の第十一節でこう述べる。

「人間がその悪習を悔い改めず、キリストにおいて新たにされないまま死ぬならば、人間は永遠にそのような高慢、僭越、遜大な悪魔同然の者、怒れる獅子、嫉妬ぶかい犬、引き裂く狼、毒虫、毒あるバジリスク蛇でありつづけるだろう。（中略）キリストのうちに生きなかつたこと、神のすがたにかたどって新たにされなかつたことの証しとして、永遠の暗黒のなかで悪魔のすがたを永遠にもちつづげなくてはならない」。

神から離反した戦慄すべき状態から救われて、永遠の生命を得るためには、悔い改めて、キリストにおいて新たにされるよりほかに道はない。そこで第三章は、「人はどのようにしてキリストにおいて再び新たにされて永遠の生命を得るか？」という標題のもとに、新しい誕生の問題を扱うのである。第三章はまず、「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです」（ガラテア六―一五）という聖句を掲げて、そのあと次のように説く。「新しい誕生は神のわざ、聖霊のわざである。それによって人間は怒りと劫罰の子から恩寵と至福の子になる。信仰とみ言葉と秘蹟によって、罪の人から義の人になる。それによってまた私たちの心、気持と心情、分別、意志および情動は、イエス・キリストのうちにキリストにかたどって新たにされ、照明され、聖化されて、新しい被造物になる。と

いうのも、新しい誕生はそれ自身のうちに二つの大きな恩恵、つまり義認とそして聖化ないし新生を含むからである。『テトスへの手紙』三―五（を見よ）。

しかし人間にはこのようなキリストに似た新しい誕生のほかに、アダムを源泉とする古い誕生がある。同章第五節にはこう書かれている。「アダムから生れて、人間はその肉体的な誕生ゆえに不遜な、尊大な、高慢な霊を受けとった。もし人間がいま新しく生れて新たにされることを欲するならば、信仰によってキリストに由来する謙虚な、へりくだった、素朴な霊を受けとらねばならない」と述べて、そして第八節では、「このような新しい誕生のゆえに、キリストは私たちのとこしえの父と呼ばれる。そしてこのようにして私たちはキリストにおいて永遠の生命を得て、再び新たにされ、キリストから新たに生れて、キリストのうちに新しい被造物となるのである」と言い、さらに第九節では、「このように私たちは新しい誕生のうちに生き、そして私たちのうちに新しい誕生が生きる。このように私たちはキリストのうちに生き、そしてキリストが私たちのうちに生きる」と説くのである。

第四章は悔い改めの問題を扱い、第五章は信仰について説く。第四章一節は次のように始まる。「悔い改め、ないしは真の回心は、神のわざ、聖霊のわざであって、これによって人間は掟に基いて自己の罪を認識し、罪に対する神の怒りを知り、これによって心のなかに悔恨と痛苦が喚びおこされるが、しかし福音に基いて神の恩寵を認識し、そして信仰によってキリストにおける罪の赦しを獲得する」。ここで注目されるのは、悔い改めが新しい誕生とまったく同じように、神のわざであるということである。そこで想起されるのは、「信仰は私たちの内部で行なわれる神のわざである」というルターの言葉である。では、アルントは信仰についてどのように言っているか、第五章は「真の信仰とは何であるか？」という標題のもとに、『ヨハネの第一の手紙』から、「イエスが救世主であることを信じる者はみな、神から生れた者です」（五―一）を掲げて、続いてこう述べる。

「信仰とは罪の赦しと、そして神の言葉と聖霊によって火を点じられた永遠なる生命とについての、キリストにお

いて約束された神の恩寵に対する心からの信頼、疑いない信用である。この信仰によって私たちは、代価をまったく払わずに、私たちの功德というものもいっさいなしに、純粹な恩寵から、キリストの功德のゆえに、私たちの信仰がたしかな土台をもって揺らぐことがないように、罪の赦しを得る。そしてこの罪の赦しが私たちの義であり、その義は神のまえに真実で不変でそして永遠である。というのも、それは天使の義ではなくて、キリストの従順、功德、血の義であって、信仰によって私たちのものになるからである」。

アルントのこの「信仰」をルターのそれと比較してみると、そこには若干の差異が認められる。まず第一にルターにおいては、「信仰は私たちの内部で行なわれる神のわざである」、⁽²⁵⁾ というように、信仰とは神に由来する、神の恩寵であったが、アルントにおいては信仰の源泉が明示されていない。第一巻序文からこの第五章にいたるまでの記述において、すでに何回も信仰について言及されてきたが、しかしその源泉はやはり不明である。ルター派教会の牧師としてのアルントにとつて、信仰が神のわざであることは、あまりにも自明の理であるがゆえに、ことさらそれを言うことを避けたのだろうか。いずれにせよ、アルントの「信仰」は「心からの信頼、疑いない信用」なのである。この「信頼」という語は、ルターの「信仰とは神に対する生き生きとした、断乎たる信頼である」⁽²⁶⁾ という発言を想起させるが、しかしアルントのこの「信仰」には「信仰のみが義とする」⁽²⁷⁾ というルターのその「信仰」の絶対性というか、あるいは直接性というような力は感じられない。ルターにあっては、信仰がただちに義をもたらすのに対して、アルントでは信仰によって、まず罪の赦しを得られ、それが「私たちの義」であるというのである。そこで、その罪の赦しについて、もう一度第四章をふり返ってみると、「悔い改めは……神のわざであって、……これによって人間は……自己の罪を認識し……心のなかに悔恨と痛苦が喚びおこされるが、しかし福音に基いて神の恩寵を認識し、そして信仰によってキリストにおける罪の赦しを獲得する」というのであり、そして第五章では、その「罪の赦し」がすなわち「私たちの義」となるというのである。義に到達する道程は長い。それはまず悔い改めに始まり、罪の認

識をへて、心に悔恨と痛苦が生じるが、神の恩寵を認識し、恩寵を信仰することによって罪の赦しが得られ、その罪の赦しが同時に義である、ということになる。この道順の出発点は悔い改めであって、信仰は到着点前最後の通過点であることを確認しておかなくてはならない。

ところで、悔い改めと信仰はそれぞれどのような作用をもつか、見てみよう。まず悔い改めについて、第四章一節は次のように説く。「悔い改めによって行われることは、肉とそして心のあらゆる肉欲と悪習とを圧殺し十字架にかけること、霊を再び活かすことである。こうしてアダムとその悪習に属するいっさいのものは私たちの内部で真の悔い改めによって死に、私たちのうちなるキリストは信仰によって生きる。というのも、この二つのことは表裏一体の関係にあつて、肉の圧殺につづいて霊の復活と再生がおこり、霊の復活と再生につづいて肉の圧殺が行われるからである」。

悔い改めによって行なわれる肉の圧殺とは、世俗的欲望と自己愛を圧殺すること、つまり自分自身の否定にほかならない。同章四節でアルントは、「この悔い改めと回心は自分自身の否定である。それは本当の十字架、本当のキリストの軛である」と言い、そして第七節では、「キリストは私たちがこのような悔い改め、すなわち本当の、内なる心からの悔い改めを行い、そして世俗から神への心の転向をするよう召命された」と述べ、さらに次のように説くのである。「キリストの功德は後悔する、打ちくだかれた、罪を贖おうとする、敬虔なそして謙虚な心によって促えられる。というのも、それは私たちが悔い改めによって罪から遠去かるための、私たちのうちにあるキリストの死の果実だからである。そしてそれは、キリストが私たちのうちに生き、私たちがキリストのうちに生きるための、キリスト復活の果実であるからである」。

この最後の「キリストが私たちのうちに生き、私たちがキリストのうちに生きる」という言葉は、第三章九節で見ただけである。ただし順序は逆で、「私たちがキリストのうちに生き、キリストが私たちのうちに生きる」となっ

『真のキリスト教』におけるアルントにとり、〈キリストとの合一〉と〈神との合一〉は、極端に言って同一事の表面と裏面という関係にあると言えよう。〈キリストの生〉（＝〈キリストが生きる〉・伊藤）の究極としてはどこまでも〈キリストとの合一〉であるが、それが裏面ではそのまま〈神との合一〉なのである。しかしこの裏面には、表面の基盤・根底という性格があると同時に、表面を自らの内へ収め取って自らを表立たせる力がある。すなわち、この裏面は自らを一般的なものとして表面化することも出来る。裏面としての〈神との合一〉は、表面としての〈キリストとの合一〉を自らの内へ収め取って、自らを一般的なものとして表立たせることがあるのである。アルントは、このような含みをもつ一般的な意味において〈神との合一〉を理解していると思われる。アルントにとっても、〈キリストとの合一〉のない、無媒介・直接的な〈神との合一〉は決してあり得ないからである」。

アルントがキリスト教徒の靈的人生的完成である「合一」を信仰の果実として極めて重視していることは、これまでの考察から明らかである。しかし彼のより大きな関心が、信仰そのものではなくて、悔い改めに向けられているという印象もまた否定できない。いずれにせよ、アルントにとって靈的生活への第一歩は悔い改めである。悔い改めに始まって照明を経て合一にいたるまで、人間はどのように生きるべきか、この『真のキリスト教』は、考えられるかぎりの靈的生活の分野・事象について詳細懇篤に説くのであるが、本稿でそれについて考察することは、紙数の関係でもはや不可能になった。しかし、本稿でも二三指摘したように、アルントの考え方は敬虔主義に多大の影響を与え、またかなりの部分にわたって継承されていく。その個々の項目については次稿において可能なかぎり比較考察したい。ただ、ひとつだけここで注意しておきたいことは、『真のキリスト教』がキリスト教会について、その現状批判、教会の理想像の提示、教会改革の必要性と方法等の問題にほとんど言及していない点である。アルントの関心は個人としてのキリスト教徒の心魂の奥ふかくに投入されて、キリスト教の改善のために大きく貢献したと言うことができよう。それはキリスト教会、あるいはキリスト教社会の改善のための基礎として評価されねばならない。そして彼が造っ

たこの基礎のうえに立って教会改革の事業にやがて着手することになるのが、フィリップ・ヤコブ・シユペーナー（一六三五—一七〇五）である。

後記 アルント『真のキリスト教』原典をお貸しくださった山内貞男氏のご友情に心から感謝申しあげる。

注

- (1) Martin Luther : An den christlichen Adel deutscher Nation, Von der Freiheit eines Christenmenschen, Sendbrief vom Dolmetschen, hrsg. von Ernst Kahler, Philipp Reclam jun. Stuttgart 1962, S. 14.
- (2) a. a. O., S. 14.
- (3) a. a. O., S. 14.
- (4) a. a. O., S. 126 f.
- (5) vgl. a. a. O., S. 129 f.
- (6) a. a. O., S. 21.
- (7) a. a. O., S. 93.
- (8) a. a. O., S. 95.
- (9) a. a. O., S. 95.
- (10) a. a. O., S. 6.
- (11) a. a. O., S. 98.
- (12) D. Martin Luther : Die ganze Heilige Schrift Bd. 3, hrsg. von Hans Volz, München 1974, S. 2256.
- (13) Luther : An den christlichen Adel..., S. 129.
- (14) a. a. O., S. 128.
- (15) Luther : Die ganze Heilige Schrift Bd. 3, S. 2258.

- (9) Luther Deutsch, die Werke Martin Luthers in neuer Auswahl für die Gegenwart, hrsg. von Kurt Aland, Bd. 2., 2. Aufl., Göttingen 1981, S. 20.
- (17) vgl. Johannes Wallmann: Kirchengeschichte Deutschlands seit der Reformation, 3., durchgesehene Aufl., Tübingen 1988, S. 20 ff.
- (81) a. a. O., S. 111.
- (61) Gerhard Sauder: Erbauungsliteratur, in: Hansers Sozialgeschichte der deutschen Literatur, Bd. 3, Deutsche Aufklärung bis zur Französischen Revolution 1680-1789, hrsg. von Rolf Grimminger, S. 252.
- (20) vgl. a. a. O., S. 251.
- (21) Des hochehrleuchteten/Seel. Herren Johann Arndts/General-Superint. des Fürstenth. Lüneburg./Sechs Bücher/Vom wahren/Christenthum/Welche handeln/Von heilsamer Busse, herzlichher Reue/über die Sünde, und wahren Glauben, auch heiligem Leben und Wandel der rech-/ten wahren Christen./Mit einer/Einleitung und kurzen Gebälden/aus der Gießischen Edition über alle Capitel:/Deme noch/Als ein Anhang, beygefügt alles, was/bisher unter dem Namen des/Fünften und Sechsten Buchs/heraus gekommen./Nebst einigen hieher gehörigen aus dem La-/tein ins Teutsche übersetzten/Send-Schreiben des AUCTORIS, BIEL./Bey Johann Christoph Heilmann, 1765.
- (22) vgl. Johannes Wallmann: Der Pietismus, Göttingen 1990, S. 17 f.
- (23) 第四卷についてはアルントは同じ節で次のように述べている。「しかし私が第四巻をつけ加えようと思ったのは、聖書キリスト、人間および自然全体がどのように調和しているか、またどのようにしてすべてのものが、神自身であるところの唯一の、永遠の、生き生きした源泉のなかに再び流れこみ、そこに到達するか、分ってもらいたいかからである」。
- (24) 「祈り。神様、あなたは最初に私をあなたにかたどってお造りください、私の身体と心魂の力のすべてから神的な真理と正義、神聖、英知を輝き出でさせたまい、私のうちに住み、生き、働いて、そしてすべてのものをのうちにすべてでいつまでもあり続けようとお思ひになられただけではなくて、のちに私がこのあなたのすがたをアダムにおいて失ったとき、もう一人の天上のアダムとしての、あなたの本質的な似すがたであるイエス・キリストによって私のうちに再びあなたのすがたを打ちたてようとなさいましたことを、感謝申しあげます。ああ、どうか私のうちに純なる心をお造りください、私に新しい

霊をお与えください、あなたと私自身を正しく認識できるように私の知力を照明したまえ、私の意志を愛と服従で充たしたまえ、私の情動と思念と欲望を聖らかにしたまえ、徹頭徹尾、私があなたの神殿あなたの住居となるように、キリストが私のうちにすがたをあらわし、こうして私がキリストのすがたに委容して次第々々に明るさをまして、ついには私があなたの御かんばせを義のうちに、あなたのお恵みとお力とみ霊によって、永遠に拝観することができますように、アーメン！」

(25) 注(15)を見よ。

(26) Luther: Die gantze Heilige Schrift. Bd. 3, S. 2258.

(27) 注(12)を見よ。

(28) 山内貞男著『近世初期ドイツ神秘主義研究 ルター、ヴァイゲル、アルントー「ドイツ神学」との係わりを基礎として』(自家版、一九八八年)一一三—一二四ページ。

参考文献(注欄に掲げたものを除く)

藤田孫太郎訳『ルター選集』第二卷 新教出版社 昭和二十四年。

松田智雄編『ルター』(「世界の名著」18) 中央公論社 昭和四十四年。

山内貞男『ヨハン・アルントー ルターから敬虔主義への道』 大阪教育大学ドイツ語研究室「芦田弘夫教授退官記念ドイツ文学論集」所収一九七二年。

Albrecht Ritschl: Geschichte des Pietismus, Bd. 2, Bonn 1884.

Werner Mahholz(ed.): Der deutsche Pietismus, Eine Auswahl von Zeugnissen, Urkunden und Bekenntnissen aus dem 17., 18. und 19. Jahrhundert, Berlin 1921.

Norbert Fehring(er)(ed.): Thema: Frömmigkeit, Marburg(Lahn) 1972.

Martin Schmidt: Pietismus, 2. Aufl. Stuttgart 1978.

Erich Beyreuther: Geschichte des Pietismus, Stuttgart 1978.